

# 民芸運動の沖縄

——「方言論争」再考に向けてのノート——

戸 邊 秀 明

## はじめに

総力戦下の沖縄人にとって、「自立」とは何だったのか、そしてそれはいかに想い描かれたのか——琉球処分という被征服の経験によつて近代と直面して以来、一貫して続けられた沖縄人の「自立」への問いと試みを、たとえそれが倒立した姿であるとしても、戦時期の沖縄人の言動から浮き彫りにする作業が、現在の「自立」の問題を考えるにも必要ではないか。このような問題意識から、本稿では「沖縄方言論争」(以下、「論争」と略)<sup>(1)</sup>について、従来とは異なった視点から検討を加える。この課題は前稿で部分的にふれたが、行論の都合から不十分に終わっている。そこで、特に前稿では欠落していた、「論争」の一方の当事者たる民芸運動の資料を再検討する方向に特化して、さらに分析を深めたい。

「論争」は、一九四〇年一月、沖縄<sup>うちなぐち</sup>口の擁護をめぐつて、沖縄訪問中の柳宗悦ら日本民芸協会同人と沖縄県当局との間で始まり、翌年

前半まで続いた。標準語励行運動が方言禁圧にまでエスカレートしている状況を見て県当局の方針を批判した柳たちに、県庁側が強く反発して起こったこの「論争」は、その後中央論壇にまで波及した。そのため沖縄史研究に限らず、戦時期日本の言語・文化・アイデンティティの問題を考察する際には頻繁に言及されてきたし、探究の幅と蓄積には相当なものがある。また柳宗悦研究の面からも、彼の朝鮮文化擁護と並んで、権力批判・抵抗の観点からくり返し評価されてきた。

しかし、この「論争」は、そこで議論された内容の豊富さや柳の理論の卓拔さによつて、さらには「論争」が「日本史」レベルの問題にまで発展したために、かえつて「論争」のテキストの内部に閉じこめられ、さらにはテキストのみから解釈を展開するため、沖縄史研究のなかに、(さらには民芸運動史研究のなかに)まだ明確には位置づけられていないと考える。私見では「論争」は、一九三〇年代後半の沖縄における発展の戦略と、民芸運動が活動を拡大しようとした意図との交点に起こった、それぞれの思惑が絡み合った事

件であり、その前後の事象の解釈にも、「論争」の全体像の読み直しは欠かせない。

本稿は、戦時期沖縄史と民芸運動史の両者に対する私の問題提起の第一歩である。

## 一 先行研究の問題点

「論争」を検討している主要な研究は、すべて二冊の資料集、谷川健一編『叢書 わが沖縄 2 わが沖縄 下方言論争』（木耳社、一九七〇年）、那覇市総務部市史編集室編『那覇市史 資料篇 2 巻中の 3』（那覇市、一九七〇年）に集録されている「文化問題資料（沖縄言語問題）」および『柳宗悦全集』（特に沖縄に関する論稿を集成した第一五巻、筑摩書房、一九八一年）に依拠している。資料集は、谷川編が民芸協会の機関誌『月刊民芸』（以下、『民芸』と略<sup>(4)</sup>）の「論争」関係論稿を収載し、那覇市編は、谷川編とはほぼ同内容に、さらに当時の沖縄発行の新聞から可能な限り関連する論稿を合わせて編集している。後者が特に「定本」となっていると見て良いだろう。また柳の全集は未発表原稿をふくめて、沖縄に関する柳の論稿をほぼもなく集めており、「柳と沖縄」を論じるには欠かせない。私もこれらの資料集から多大な恩恵を被っている。

だが、恩恵は制約としてもはたらいている。編集されたテキストを中心として、分析が自律的に展開してきた結果、編集以前に各々

の資料が抱えていたコンテキストを捨象した議論が成立してしまい、「論争」を規定していた諸条件についての基礎的な検討はまだまだ不十分である。そのため、沖縄史研究においては、民芸運動と沖縄の関係が「論争」として唐突に現れるかのように見えてしまう。ここでいう条件とは、「皇民化」やファシズム化のような蓋然的な時代環境ではなく、両者の「論争」までの具体的な関係そのものである。その基礎的な条件の検討を抜きにして、沖縄史研究にとつての「論争」の意義は確定できない。

そこで本稿は、その基礎作業の一環として、民芸運動の機関誌『民芸』を中心に、関連する柳の書簡や沖縄側の報道を用いて、民芸運動の側から彼らの沖縄とのかかわり方を再構成する。こうした検討は、沖縄側の史料の絶対的欠乏に因る、研究上の単なる迂回策ではない。この「民芸運動の側から」という視角自体、実は重要な論点なのである。

民芸運動と沖縄との関係については、民芸協会同人の前後四度にわたる沖縄行の旅程を中心に、すでに七〇年代に一定の整理がなされている<sup>(5)</sup>。だがそれらは、民芸運動に実際にかかわる立場でなされるためか、『民芸』からの無批判な抜粋も多く、当時の運動側の主張をなぞるにとどまる。しかも、研究の中心が柳に置かれるため、同人の個々の言動はすべて民芸運動として一括され、実態以上に柳の主導性が強調されている。

これと対照的に、九〇年代には、文化人類学やデザイン史等の新

しい視点からの研究が、民芸運動を批判的に捉えはじめた。いずれも、民芸運動が当時の「文化の消費」や産業振興と密接に関係している点や、ナチス文化政策との親和性、植民地との関係などの戦争協力問題等に注目しており、権力と文化の関係を対立的に捉えてきた民芸運動観を克服しつつある。また戦時期の地方文化運動の研究では、地域の側から民芸運動との関係を検証する試みからも学ぶところが多い。<sup>(6)</sup>

ところが、そうした視点はこれまで沖縄との関係では活かされていない。しかし、『民芸』を仔細に検討するならば、産業化・地域・戦争協力等の論点を検証するには、民芸運動にとっての沖縄との出会い（と別れ）は不可欠の要素であることがわかる。一九三九年から四〇年における計四回に及ぶ民芸協会同人の沖縄行とそれに関係する行動を、右の論点に注目してとらえ返すことが本稿の第一の課題である。同時に、民芸運動として一元化されてきた運動を、複数の同人が、戦時下社会の変動を受けて論調を変化させていく複雑な経過と連関させて描く必要がある。以上の検討を経ることで、直接には民芸運動研究の前進にかかわる分析が、その裏面において、「論争」で沖縄がどのように位置づけられていたかを浮き彫りにし、かえって戦時期沖縄社会への新たな注目を要請するはずである。

ただし、本稿では紙幅の都合から詳細な論証は他日を期し、四度の沖縄行にそって順に論点の骨格のみを示す。ノートとする所以である。

## 二 出会いにおける微妙な一致

### ——第一回沖縄行の経緯とその影響——

一九三〇年代後半の民芸運動は、雑誌『工芸』の発行を軌道に乗せ、日本民芸館（一九三六年開館）でも次々に意欲的な展覧を実施していた。一九三八年当時、「不思議なことに、まさしくここにいると、日本が有史以来最大の戦争に乗り出しているという実感がまるで湧かない」ほど都会には活気があり、「どんな物も、骨董品でさえ、よく売れ」る状況が運動を後押ししていた。<sup>(7)</sup>しかし他方で、日本民芸協会・日本民芸館の運営、人事に関する問題が続いたため、三八年なかばには柳の創作活動は大きく制約を受け、柳自身が運動の責任者から身を引き、著作に専念できるよう「書斎の人」になりたいと漏らしている。<sup>(8)</sup>

三八年末から翌年一月なかばに至る、柳の初めての沖縄行は、こうした活況のなかの沈滞という状況に訪れた機会だった。形式は県教育会の招待となっていたが、当時の県教育界に柳や民芸運動への関心があったとは考えられず、実際の招聘は県学務部長の山口泉が行った。この背景には、協会の運営にかかわり援助者でもあった官僚・水谷良一から友人の山口に、「今柳先生がゆきづまって、苦しんでいるので、一つ沖縄へ呼んであげてくれ」との依頼があった。<sup>(9)</sup>自身、柳の朝鮮文化論に感心して以来、その民芸論に傾倒していた山

口は、三八年一〇月の沖縄着任後、水谷からの依頼をすぐに実行した。学習院時代の同窓である尚侯爵家との関係から、すでに長く沖縄へのあこがれを抱いていた柳ではあったが、この招聘によって、予期せぬかたちで「急に琉球に行く事になった」のである。<sup>(10)</sup>

柳の初めての沖縄訪問は、このように民芸運動側の内情とかかわっていた。沈滞した気分から解放されたこともあって、柳は一気に、沖縄に魅了され、「工芸の天国の様な所」と絶賛した。他方、山口の側にも思惑があった。各県の商工課長を経験していた山口は、柳の沖縄訪問が沖縄を広く売り出す起爆剤になることを期待した。<sup>(11)</sup>

特に観光と工芸の振興に柳の力が利用できると思ったようだ。この点は、中央から赴任した官僚に限らず、地元沖縄の政治家や知識人も大いに関心を寄せていた。観光への関心はすでに日中戦争以前から生じていたが、戦時下の厚生運動や地方文化への関心が高まるなか、本格的な開発への期待が膨らんでいた。<sup>(12)</sup> 柳は、半月余りの滞在中、賛同者との会合や民芸品蒐集の合間に風致地区保存座談会に出席し、沖縄の特色を活かした史蹟・風俗の保存を提言している。<sup>(13)</sup>

工芸振興の面では、山口は、濱田庄作・河井寛次郎ら同人によって壺屋の陶工を指導してほしいと期待を表明している。<sup>(14)</sup> また帰京後の柳はこの期待に応じるように、東京で規模の大きな沖縄物産展を開催すべく、高島屋の担当者などとの交渉に奔走している。これは同人の沖縄行の費用捻出とも関係があるが、重要な意図は物産展を成功させて山口と県経済部の関係を良好にし、今後の運動と沖縄と

の関係拡大を有利に進める点にあった。<sup>(15)</sup> 民芸運動は、当時県の工業指導所を中心に進められていた新作工芸が沖縄の伝統的な技法を無視し、破壊していると見ていたため、従来通りの県主催の物産展ではなく、民芸運動独自の企画として成功させたいと考えていた。

以上のように、第一回沖縄行は、沖縄との良好な関係から出発した。その訪問には民芸運動と関係のある官僚による招聘という偶然が作用したが、民芸の理念のさらなる普及や地域との協力関係を求め始めた運動側にとっては、千載一遇の機会であった。

柳の初めての沖縄行は、民芸運動全体にとっても大きな転機となった。沖縄行に刺激されて、運動は次の二つの方向に大きく発展する。

第一に、民芸協会同人の集団での沖縄行が企画された。これは「協団的移動制作」の試みと称された。この目的については、民芸運動の理念との照合など、詳しい検討が必要だが、柳の筆になる「なぜ琉球に同人一同で出かけるか」（『民芸』創刊号に掲載）では、すでに見たような沖縄の宣伝、産業振興のための地元工人との交流についても目的のなかに位置づけられている。

第二は、機関誌『民芸』の発刊である（三九年四月創刊）。民芸運動は、すでに柳の編集による独自の雑誌（『工芸』）を持っていたが、号をおうごとに編集・造本に凝り、定期的な刊行すらままならなくなっていた。他方で地方文化への注目など、総力戦下の新しい「文化」への注目が起こるなかに民芸運動が積極的に参入して、固有の



役割を果たすべきだとの意見が同人間に強くなった。そこに琉球行の話が舞い込み、自分たちの活動を迅速に広報・宣伝し、より多くの人に行き渡るような機動的な雑誌を編集しようとの意見が持ち上がった。編集長には、同人の式場隆三郎（医師・評論家）が就いた。沖縄との出会いを大きな契機として生まれたこの『民芸』こそ、これ以後、民芸運動自身が沖縄との関係のあり方を表現し、「論争」の構図を創出するメディアとなる。

### 三 協同・啓蒙・蒐集

#### ——第二回沖縄行の内実とその意味——

第二回沖縄行は一九三九年三月から五月の長期間にかけて行われ、さらに最後に残った最年少の同人、田中俊雄（織物研究者）が帰京したときには九月半ばになっていた。<sup>(16)</sup> その間の同人たちの行動の形態は大きく分けて四つ、すなわち、①生活から制作にわたる「協同」、②聞き取りや図書館での調査に基づく「研究」、③工芸の指導や座談会などでの意見の開陳を主とする「啓蒙」、④市場などでの古着の大量購入や風物の写真撮影などによる「蒐集」に大別できる。また③④の混合形態として、買付・注文制作の依頼がある。

この沖縄行は民芸運動自体にとって、どのような意義を持っていたのだろうか。

第一に、「協同的移動制作」によって、従来よりも同人間の結合が

強まった。これまで単独で仕事をすることがほとんどだった様々な分野の工芸作家たちが、長期間合宿し、共通の目的、見通しをもつて仕事を進められるようになったのである。

第二に、地域との関係がさらに密になった。同人間の協同とともに、特に陶器について地域（壺屋）の工人と共同で制作が行われたことは、地元の工人にとっても刺激となった。協同と共同の諸作業の成果は、沖縄でも披露され、工芸展として多くの参会者をえた。また地元紙との関係も重要である。管見の限り、沖縄のメディアのなかでは、県内最大の新聞『琉球新報』が、持続的に民芸協会同人に好意的であり、一九三九年の同紙には同人の寄稿（もしくは転載）が少なくない。

第三は、この旅が植民地台湾への蒐集・研究旅行を含んでいたことである。最後まで沖縄に残った田中は、織物の研究のために先島（宮古・八重山）からさらに台湾まで足を伸ばし、台湾先住民の居住地に入り、写真撮影や織物の蒐集を行っている。これは民芸協会と連絡を取り合っている行動（特に蒐集では資金が出た）であった。<sup>(17)</sup>

今回の沖縄行の成果は、『民芸』三九年一月号の「琉球特集号」全八九頁に結実した。これには沖縄にもっとも長期に滞在した田中のはたらきが大きい。沖縄での交流をフルに利用して、同人、沖縄の地元文化人、県庁等、多彩な執筆者を確保している。また当時二五歳の田中は、今号から編集に加わり、以後、式場のもとで編集実務を取り仕切った。

こうした成果がもつ意味や影響については、以下の点に注目しておきたい。

第一に、民芸運動は沖縄県で官民が期待している産業化・商品化の問題とますます密接にかかわっていった。最初の招聘者である山口が内閣情報部書記として転任（四〇年三月末）してからも、県との関係は続いた。田中は、平野学務課長との談話中に、民芸沖縄支部開設の話まで出たことを記録している。また今回の特集号も、同人の琉球行の成果を披露するため、高島屋で開催する展覧会に合わせた特集として刊行されている。

第二に、沖縄から台湾へという連続性についても注意したい。行動は田中一人とはいえ、民芸協会と連絡をとっておこなわれ、各地での行動のスタイルは基本的に沖縄でのそれと変化していない。また官からの協力という点では、総督府理蕃課による事前の連絡によって、調査の行く先々で便宜を受けており、在台日本人研究者との交流も見逃せない。こうした行動の連続性は、後述するように、「論争」のなかで沖縄と台湾を切断していく柳たち同人の論調との齟齬として、さらに吟味する必要があるだろう。

そして第三に、同人の沖縄行が与えた影響は、沖縄の論調をも変化させていった。島袋源一郎（教育者・郷土史家）は、沖縄の諸家の多くが民芸を肯定する際に、どちらかといえば過去の物質的遺産に注目するのに対して、民芸運動の「真意」は、「素直な親切な沖縄県民が今少し古への剛健進取な民族性に立返り勇住邁進して益其の

文化を発揮すべし」との点にあると受け取っている。<sup>(18)</sup>これは同時期に盛んになっていく南進論との関係で、沖縄人を海洋の民として称揚する言説に繋がる論理展開を示唆している。民芸運動が戦時下に「日本文化」の問題に議論を収斂させていくこうとするのに対して、沖縄の側では民芸運動と接触することで、外に拡大する論理として受容・領有している。民芸運動の沖縄とのかかわり方は、固定した両者の関係においてなされたのではない。それは沖縄、民芸運動ともに、互いの接触によって微妙に論調を変化させていく過程として把握されなければならない。

#### 四 「論争」の創出

——第三回沖縄行に埋め込まれた複数の文脈——

「論争」の経過については、すべて先行研究に譲り、ここでは「論争」の発端と、「論争」を民芸運動がどのように扱っていったかを、『民芸』誌面を追うことで整理しておく。

民芸協会は、三九年末、正月前後の休暇を利用して第三回沖縄行を行った。ただし、参加者は総勢二六名に膨れ、前回とは大きく異なる陣容となった。内訳は、民芸協会同人九名／民芸販売事務担当二名／写真関係三名／映画関係二名／観光事業関係二名／その他八名である。<sup>(19)</sup>この布陣に今回の沖縄行の意図が表現されている。第一の意図は、もちろん前回の成果をふまえ、沖縄に恒久的な拠点を置

き、常時同人が滞在して制作に当たれるような基盤をつくることであつた。そしてそのためには、沖縄側との関係を良好にしなければならぬ。そこで、沖縄の宣伝を推進する役割を積極的に担おうと努めた。民芸運動に理解を示す文化人を参加させて、沖縄の魅力を体感してもらい、宣伝に役立てることが第二の意図に挙げられる。

今回の訪問団が観光団と称され、その周遊コースが当時大阪商船が募集していた観光視察団とはほぼ同じであることは、この意図を裏書きする。<sup>(20)</sup>さらに第三に、沖縄を中央に紹介するための「琉球案内」等の編纂、絵葉書・映画製作を意図していた。柳は事前に、参加者の水澤澄夫（国際観光局より派遣）に今回の沖縄訪問の目的を、「絵葉書と図録と案内記と映画を作つて来ること」と告げている。<sup>(21)</sup>

以上から、「論争」の発現場が「観光と文化をめぐる座談会」（強調―戸邊）と銘打たれていたことも納得がいく。これまでの風致地区保存座談会を拡充したこの座談会で、観光団をともなつてあたかも周旋人<sup>プロモーター</sup>として現れた柳たちに、沖縄の知識人は今後の方向性を求めたし、同人もその声に応えた。そこでは、民芸運動側がどう否定しようとも、啓蒙・指導の観点は不可避免的に成立しており、沖縄の人々との非対等な関係が、かえつて民芸運動への反発を誘発しないではいかなかった。観光の問題は、「論争」の重要な伏線といえる。

彼ら同人が今回の沖縄行で意図したのは、「論争」がはじまつた直後から急遽計画され、同年三月号として発刊した第二次沖縄特集号に良く表現されている。田中俊雄の精力的な編集により、今回も

本文九五頁の増大版の特集ができあがつた。ただし、全体としてみると、まずは今回の沖縄行の意図を広く主張しようという構成になつており、「論争」に関する識者の論考はその一部分である。ここではむしろ、「論争」に直接関連する論考以外に埋め込まれた文脈として、次の三点に注目しておきたい。

第一に、観光団の結果をふまえて、「琉球文化各論」の部を設けている。そこでは、観光資源となる沖縄の風俗（墓制や琉装等）が個別に概括され、さらには観光関係者が、沖縄の観光開発がいかに有望であるか、改善意見も交えて論じている。おそらく、これが沖縄特集号の当初の意図であつた。「論争」の資料集では、こうした文脈は見えなくなつてしまつてゐる。

第二に、「保存に反対すべき」ものとして、衛生問題では運動側と県の見解はまったく一致しており、県当局との関係では是々非々の議論が可能であつたことがわかる。式場は座談会の席上、沖縄で「精神病者」が放置されているため収容が必要と論じて、席上柳と論争を始めた張本人である警察部長から賛同と歓迎の意を受けた。<sup>(22)</sup>

そして第三に、特集が「日本文化と琉球の問題」と題されている点が重要である。民芸協会同人は、特集の目的を、「論争」を「ひろく日本文化全般におよぶ問題」として提起し、「民芸運動の現代日本文化における根本的な存在意義」を訴えるためとしている。<sup>(23)</sup>「論争」から沖縄の現在の経済的窮状を分析し、批判するのではなく、あくまで文化領域の問題として設定し、「論争」を枠づけようとしている。

この「論争」に対する態度の宣明は、民芸運動全体が翼賛文化運動との親和的論調にふみこむ徴候であつた。

## 五 閉ざされた対話

### ——第四回沖繩行前後と「論争」の終結——

第二次琉球特集号が前記のように構成された背景には、編集にあつた式場・田中の強い意志がはたらいている。彼らの意図と見通しは、どのようなものだったか。二人に共通する視点を摘示しよう。

①柳の主張、ひいては民芸運動の理論の卓越性は明らかで、「論争」の決着はついているとの認識がある。事実、式場は、第二次特集号編集の時点では今後も続々と観光団を計画していこうとする算段だった。柳という「世界的学者に対し、思ひあがつた態度」をとる沖繩側に対する彼の反発も、こうした観測を主観的に補強した。②彼らが樂觀的に自己の勝利を確信する背後には、沖繩の知識人・文化人が柳擁護にたちあがるだろうとの予想が控えていた。③日本文化の問題として「論争」を広く訴えることは、民芸運動がもつ意義を社会に広める良い機会と考えている。

しかし、その後、特に式場は沖繩への関心を急速に失っていく。もはや「論争」は沖繩の問題ではないとして、沖繩との直接の対話を拒否している。学務部の再度の柳批判の声明（四〇年六月二四日

付）でも両者は依然平行線をたどり、また同時期（七・八月）に数人の同人（柳、田中、写真家・坂本万七の三名）で行つた第四回沖繩行の最中、柳たちが微罪で拘禁されるに至つては、確かに嫌気もさすだろう。ことに式場の場合、敬愛する柳をそのような目にあわせた県への怒りは強かつたと推定できる。しかし、関心の衰退には、さらに次のような事態がより深くかかわっていた。ひとつには、中央に積極的に導入した「論争」が、結局民芸運動側が意図した方向に實際を動かす力にはならなかつたことが大きいだろう。柳は「論争」における自己の正当性を訴えるために、県庁への再批判を中央の有力雑誌に寄稿するよう目指したが、受け入れられなかつた。<sup>(24)</sup>と同時により重要なのは、沖繩と対照的に、東北が式場たちの心を捉えていったことである。東北では、官民の連携による農村の産業振興の観点から民芸展などが大がかりに組織されはじめ、行政の支援も比較的厚かつた。民芸運動の理念に呼応するのは、沖繩よりも東北であると考えられたのである。<sup>(25)</sup>沖繩・東北を単に日本の北と南と捉え、対照させている点も、彼らの現状認識、社会の構造的把握がいかに弱いものであつたかを示している。

こうした関心の変遷は、四〇年一一・一二月合併号として三度組まれた沖繩特集号の構成にも現れている。一二二頁とさらに増加した本号は、「沖繩言語問題」特集号と銘打たれている。だが、本号の大半は、一方で言語問題に関する言語学者・民族学者・評論家の一般的な「方言」擁護の評論が配され、他方では沖繩出身者の沖繩学



の論稿や、同人の「沖繩文化研究」と題した沖繩研究の成果を披露する場となっている。「論争」の継続という側面はあるものの、正面から民芸運動への反対意見を論駁する形式はとられていない。この構成は、式場たちがすでに県との論戦は決着がついているとして、「文化」の研究に集中しようとした意向を反映していると考えられる。今回の特集号が、協会の紀元二千六百年奉祝記念事業（「琉球工芸文化展覧会」「琉球風物写真展覧会」他一件）の開催に合わせて企画されたことも、この意向を傍証するだろう。

しかし、この態度を、沖繩とは別の場所から批判する声があった。柳の全集には、当時台北帝国大学で民俗学を研究していた金関丈夫に宛てた比較的長文の書簡が残っている。<sup>(26)</sup>「論争」にかかわる金関の原稿について、柳が寄稿への感想を認めた礼状である。金関の原稿は『民芸』にはなぜか掲載されなかったため、金関の論旨は、柳の読みのなかからしか復元できないが、それによると金関は、台湾で民俗研究にあたっている自身の眼からは、「論争」における民芸運動の主張が「文化価値問題」に集中しており、「人道問題」からする県への批判ではないように見えると、民芸運動側にも一定の批判的見解を示したようである。柳は、金関の「人道的立場」を重視する見解に賛同を示し、今回のように権力をまっこうから批判する以上は、沖繩への人道的な「義憤」なしにはありえないのだと抗弁し、金関との一致を強調している。しかし、この書簡で金関との間に示されているズレは、「人道的立場」があるかどうかではなく、民芸運動が、

なぜ「文化価値」の問題に特化したかたちで「論争」をつくろうとしたかという点にある。柳は植民地である台湾と「日本系文化価値に甚だ富める所」である沖繩とは異なると答え、前者ならば以前朝鮮でもそうだったように人道問題を主として論陣を張るが、後者は「之を文化価値問題として取り上げる方、人々を納得さす上に遙かに効果的だと考へた」。式場たち編集者が「日本文化」の問題として「論争」を位置づけようとしたことと符丁を合わせて、柳もまた、沖繩から植民地との接点を消去しようと努めている。

民芸運動は、「論争」の結果、沖繩との（そして植民地との関係においても）対話が続ける機会を逸してしまった。以後の民芸運動は、一方で東北や山陰などの産業振興にかかわり日本文化の「発見」をさらにすすめていき、他方で「満洲国」や中国占領地に民芸の調査に向かうという、戦時期の活動の方向性を確定していくことになる。「論争」の過程は、そうした方向に舵を切る契機としても、当事者の民芸運動に強い反作用を与えたといえる。そして「内地」と「共栄圏」のあいだで、現実の沖繩への視野は閉ざされていった。

『民芸』誌上における「論争」の軌跡の終末は、四一年四月号掲載の田中俊雄・杉山平助の往復書簡「沖繩方言論争終結について」に見られる。経済的観点から県側の主張に賛同する杉山に対して、田中は、杉山の議論の意義をある程度認めて歩みようとするものの、結局、文化問題として「論争」を捉える田中と、経済・政治の問題として捉える杉山とは平行線をたどっている。田中は、これで論争



をうち切ると同時に、末尾で前号をもって『民芸』編集の実務から離れたことを明らかにしている。

『民芸』を主要なメディアとする民芸運動の沖縄への関心は、こうして二年余りの短い高揚を終えた。沖縄戦から戦後にかけての柳の沖縄に寄せる思いや、濱田・河井たち実作者が戦後沖縄の工芸復興に大きく寄与するなど、同人個々の言動としては、「論争」後も沖縄への関心は持続している。しかし、『民芸』ではこの後敗戦まで、沖縄に関する論稿は掲載されていない。

## おわりに

「論争」に至る過程から、民芸運動が沖縄に抱いた意図と結果を大急ぎで概観した。そこからは、従来の「論争」研究に対する問題提起を次の三つの点で確認できよう。

第一に、民芸運動の沖縄との出会い方について——柳たちは工芸産業の振興と観光開発という地元が要求する発展の期待に応えるかたちで沖縄に現れ、民芸運動側も沖縄との出会いを契機に運動を拡大し、社会的意義を増すことを狙っていた。ここでは両者の思惑には一致するところがあった。「論争」の内容や経過のみに注目すると、当初の関係が見えなくなり、「論争」の条件が見失われてしまう。

第二に、民芸協会同人の沖縄行がもつ意義について——同行の行動は、この沖縄側の期待にも規定されるかたちで、指導・啓蒙と研

究・蒐集が大きな位置を占めた。もちろん濱田や河井等の実作者が中心となった第二回沖縄行は「協団移動制作」と銘打っていたように、地元の工人との共同作業によって互いに学習するという創造的な過程があった。しかし、沖縄・民芸運動双方の当時の記録を見る限り、同人の主観がどうあれ、その行動はオリエンタリズムに接近しており、沖縄の人々が、同人の地方文化擁護の論陣と習俗への好奇なまなざしとを混同する可能性は充分存在した。しかもそうした混同を生む契機は、沖縄が望む産業化のなかにすでに胚胎していたため、同人への批判は冷静であることは難しかった。民芸運動の側は、沖縄からの批判の大部分を曲解、感情的、支離滅裂などと評しているが、そうした発言にならざるをえない根拠は、「論争」以前の両者の関係のなかにすでにはらまれていたのではないか。

第三に、「論争」過程における民芸運動の積極性と、沖縄への関心の急速な衰えについて——民芸運動側（特に式場・田中）は、「論争」における県庁官僚のみならず地元沖縄の人々からも起こった反発に、困惑と怒りを覚えたと考えられる。熱心に沖縄に手をさしのべているにもかかわらず恩を仇で返すような態度に、式場たちは急速に沖縄への関心を、少なくとも沖縄の現在への関心を失っていった。また式場や田中は『民芸』誌上に「論争」を構成するにあたり、沖縄人が近代以来抱えてきた差別の問題として考究・検討するのではなく、初めから「日本文化」の問題として中央論壇にアピールしようとした。中央の「論争」は、同人側が自分たちの活動の意義を認

知させるために打ち出した枠組みに強く規定された。そこには、出会いの最初から存在する沖縄との非対等な関係と、当時の知識界の大きな潮流である「文化」をめぐる問題に民芸運動が参入を企図する文脈とが絡まり合っており、「論争」自体が運動の拡大にとっての資源とされた側面がある。こうした傾向を柳もまた免れていなかったことは、金関との秘められた論争に見てとれる。

もとより素描に終わった本稿には限界も多い。紙幅の都合から、詳細な検討には別の機会を得たい。最後に、今後の課題を摘記して結びにかえる。

本稿では柳個人の研究から離れて民芸運動研究として展開する志向を打ち出したものの、なお柳が作成した情報に大きく依拠している。しかし、当時の民芸運動が柳一人の言動に還元できない広がりを持つ以上、今後、各同人の活動について、より詳しく把握する必要がある。特に従来検討がない式場や田中たちの軌跡を追うことは、民芸運動が同時期の他の思想潮流とどのように連関しているのかを理解する上で重要と考えられる。

もちろん、この課題は民芸の群像についての個別研究に収斂するのではなく、あくまで民芸運動史の再検討に繋がらなくてはならない。当該期の文化運動が抱えざるをえなかった総力戦と文化との緊張関係を、民芸運動のなかにさらに深く探る作業が欠かせない。その際には、本稿で提起したように、産業化や観光など、戦争そのものとは一見関係がなくとも、それを推進することで総力戦下の社会

再編成／再統合に参入し、積極的な位置を占めてしまうという複雑な効果についても綿密に測るべきだろう。

そして最大の課題は、民芸運動側に対応するはずの、沖縄にとつての「論争」に至る社会の実態をいかに捉えるかである。「論争」を、民芸運動が意図した「文化価値」の閉域から解放するためにも、戦時期沖縄の社会史を「文化」の問題として論じる必要がある。

#### 註

- (1) この「論争」の名称には「方言論争」のほか、「言語論争」「言語問題」等が使われているが、ここではもともと一般的な用法にしたがった。
- (2) 拙稿「沖縄 屈折する自立」(『岩波講座・近代日本の文化史8 感情・記憶・戦争』岩波書店、二〇〇二年)の第一節は、本稿と補完的關係にある。沖縄史にとっての「論争」の位置付けに関心のある方は参照されたい。
- (3) 「論争」については研究が多数あるため、現在の水準を示すと思われる近年の研究のみ挙げる。単行書では富山一郎『近代日本社会と「沖縄人」』(日本経済評論社、一九九〇年)、同『戦場の記憶』(日本経済評論社、一九九五年)、小熊英二『日本人の境界』(新曜社、一九九八年)第五章、安田敏朗『帝国日本の言語編成』(世織書房、一九九七年)、同『国語と「方言」のあいだ』(人文書院、一九九九年)、論文では屋嘉比収「可能性としての「方言論争」——柳宗悦の言説を読む」・親富祖恵子「国家主義を超える視座——柳宗悦と方言論争」(ともに『新沖縄文学』八〇号、一九八九年)などがある。詳しい参考文献は、各単行書の該当箇所で注記されている。これらの研究はいずれも、一方で何らかのかたちで柳宗悦を批判的に検討し、他方で沖縄人の側にも複数の意見があったことを的確に捉えているが、『民芸』そのものにあたって検討した研究は確認できない。
- (4) 『月刊民芸』は一九四二年一月刊行の四巻一号(以後、四——と略)から

誌名を『民芸』としたが、本稿ではすべて『民芸』に統一した。なお、戦後の協会機関誌『民芸』（月刊）は、戦前の『民芸』とは性格が異なる。

- (5) 小野寺啓治「柳宗悦研究資料——琉球へ美の浄土」の発見①④（『民芸』二六三、二六九号、一九七四年一月、一九七五年五月）、同「柳宗悦研究資料——沖縄言語問題」①②（『民芸』二七二号・二七五号、一九七五年八、十一月）、同編「柳宗悦沖縄旅行年表」（『柳宗悦全集』第一五巻付録・月報7、筑摩書房、一九八一年）、水尾比呂志「評伝柳宗悦」（筑摩書房、一九九二年）。なお最近の柳研究として竹中均「柳宗悦・民芸・社会理論」（明石書店、一九九九年）があるが、沖縄に関する記述と「満洲」に関する記述とで対象や視点が一貫していないなど問題がある。

- (6) 長田謙一「新日本美」の創生——戦時下日本における民芸運動」（『批評空間』二一九、一九九八年）、David Coates, "Japan's Mingei Movement and The Pacific War"（『京都精華大学紀要』六号、一九九四年）、金谷美和「文化の消費——日本民芸運動の展示をめぐる」（『人文学報』七七、京都大学人文科学研究所、一九九六年）、同「民衆的工芸」という他者表象——植民地状況下の中国北部における日本民芸運動」（『民族学研究』六四—四、二〇〇〇年）。北河賢三「戦時下の地方文化運動——北方文化連盟を中心に」（赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』日本経済評論社、一九九三年）。

- (7) 柳筆・バーナード・リーチ宛書簡（翻訳）、一九三八年八月八日（『柳宗悦全集』以下、『柳』と略）二二巻下、一〇〇頁。ただし柳は、引用の直前には日中戦争を「悲惨な戦争」と明言しているように、この状況を必ずしも肯定的には見ていない。

- (8) 柳筆・河井寛次郎宛書簡、一九三八年六月一二日付（『柳』二二巻下、九七頁）ほか、同時期の河井宛書簡に窮状が吐露されている。

- (9) 小野寺啓治が一九七二年当時に聞いた山口からの発言（前掲小野寺「柳宗悦研究資料——琉球へ美の浄土」の発見）①、『民芸』二六三号、一九七四年十一月、一八頁）。

- (10) 柳筆・外村吉之介宛書簡、一九三八年二月一九日付（『柳』二二巻中、一五九頁）。

- (11) 内務官僚である山口は、敗戦まで官吏にあるあいだ、各県の商工課長や経済部長を務め、「見本市、博覧会の出品などで業者を連れて団長をつとめ、北海道や満洲に出かけ」た経験があるなど、産業開発の面でも知識と経験があった（山口泉「回想の人・柳先生——民芸運動と私」『民芸』一四九号、一九六五年四月、五〇頁）。なお山口の県学務部長時の事跡は、約半年の短い在任期間にもかかわらず、多くの点で検討を要する。

- (12) 沖縄側の当時の対応については別稿を期したいが、観光開発への期待が盛り上がる契機などについては前掲拙稿で一部論じた。

- (13) 「郷土史跡保存協会／柳氏迎へ座談会開く」（『大阪毎日新聞鹿兒島沖縄版』一九三九年一月七日）。なお前掲水尾著書・小野寺各論文は、この沖縄行に河井・濱田も同道したと述べているが、当時の沖縄側の記録や柳の書簡などからは二人の同行を確認できなかった。

- (14) 「琉球の民芸を語る座談会」（『月刊琉球』二〇号、一九三九年二月、二八頁）。

- (15) 柳筆・河井寛次郎宛書簡、一九三九年二月五日付（『柳』二二巻下、一〇六—一〇七頁）。

- (16) 参加者は、柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎、柳悦孝、外村吉之介、岡村吉右衛門、芹澤桂介、田中俊雄の九人。沖縄滞在時の同人の行動は九回にわたって『民芸』に連載された「琉球日記」に記録されている（『民芸』一一二—九、二一二、一九三九年七月—十二月、一九四〇年二月）。

- (17) 田中の足取りについては、日本民芸協会同人（実際は田中が執筆）「琉球日記8 先島・台湾紀行」（『民芸』一一九、一九三九年十二月）、田中俊雄「台湾の蕃社」（『民芸』一一七、一九三九年一〇月）等を参照。

- (18) 島袋源一郎「郷土博物館」（『民芸』一一八、一九三九年十一月、三七頁）。また民芸協会同人の沖縄行の影響は、沖縄社会における文化の消費行動にも微妙に作用していた。壺屋の陶工、新垣栄盛によれば、その変化は次の

ように現れた(参照、「民芸協会の琉球行はどんな影響をのこしたか」中の新垣回答部分、『民芸』一一八、一九三九年一月、五九、六〇頁)。まず、①沖縄のなかでも壺屋が脚光を浴びるようになり、「知識階級の人の注文」が増加して、「壺屋焼は将来いよいよやりがひあり」といふ予想がつく(「傍点原文」と、陶工に自信を与える状況を生んだ。この点は、民芸運動の望んだ方向が地域で拓けた証左のように見える。しかし、②日曜には家族連れで壺屋を訪れる「知識階級」の「遊ぶ者」が「激増」し、「ために壺屋に小銭のおちることも多くなった」という状況になると、評価が難しい。しかもこうした沖縄人自身による一種の観光地化は、③商人や工芸指導所が濱田庄作のイミテーションの作成を壺屋の陶工に奨励し、「それが又よく売れるのだ」と言わしめる人々の価値づけと同根の行動と理解しなければならぬ。ならば、①についてさえ、楽観的な評価はできない。民芸運動の影響は、運動の主唱者の意図を超えて広まり、彼らが「発見」したはずの「天国の様な所」もまた、支配的な文化価値の再生産と無縁ではないことを逆説的に証明している。こうした文化運動が与える様々な作用については、沖縄に限らず、一九三〇年代の消費文化の社会的影響を測るなかで、今後分析を深めていきたい。

(19) 参加者は次の通り。民芸協会同人―柳宗悦(民芸館館長)、式場隆三郎(『民芸』編集長、国府台病院長、評論家)、浅野長量(僧侶、前たくみ工芸店代表)、濱田庄司(陶工)、船木道忠(同)、佐久間藤太郎(同)、棟方志功(版画家)、鈴木繁男(漆工)、田中俊雄(『民芸』編集事務)／販売事務―鈴木訓治(たくみ工芸店代表)、佐々倉健三(銀座松屋仕入部)／写真―阪本万七(桃源社)、土門拳(国際文化振興会)、越壽雄(『グラフィック』編集部)／映画―細谷辰雄(松竹計画課長)、猪飼助太郎(松竹映画カメラマン)／観光事業―水澤澄夫(国際観光局)、井上昇三(日本旅行協会)／その他―遊佐敏彦(三井報恩会社会事業課長)、同夫人、保田與重郎(評論家)、濱徳太郎(帝国美術学校工芸科講師)、相馬貞二(教育家、青森民芸運動参加者)、宮田武義(日比谷山水楼主人)、鈴木宗平(医師、在益子)、

福井右近(トキワ電機工業会社重役)。

(20) 第三回沖縄行の旅程については鈴木訓治「再び琉球へ」・「琉球観光記」(『民芸』二二二、三、一九四〇年二、三月)、大阪商船の観光視察団については前掲拙稿を参照。

(21) 水澤澄夫「沖縄の風物と観光」(『民芸』二二三、一九四〇年三月、五四頁)。また柳筆・河井寛次郎宛書簡、一九三九年二月一六日付(『柳』二二卷下、一一四頁)も参照。

(22) 田中俊雄編「問題の推移」中の式場による手記(前掲『民芸』二二三、七頁)。この点は式場個人の見解ではないかとの異見もある。しかし、総力戦段階において、民芸運動が社会に受容される際には、もはや柳が初期に構想した小規模な集団の美の共同体ではなく、強く社会変革・生活改善のプロジェクトの一環として構想されており、美の基準に「健康」という価値を据える民芸運動にとって、衛生の問題は密接な連関を持っていた。関連して参照、式場隆三郎「琉球文化の意義」(前掲『民芸』二二三)。

(23) 日本民芸協会同人「我等はこの目的のために特輯する」(前掲『民芸』二二三、三頁)。

(24) 柳の県庁再批判は、『文藝春秋』八月号への掲載を予定していた。だが、七月上旬には書き上げられていたこの知事宛公開状を、直前になって編集側が掲載を断った。柳は第四回沖縄行の途次、式場に宛てて『改造』「中央公論」『新潮』の誌名を挙げ、式場の人脈を頼り、急ぎ掲載の周旋を依頼している(柳筆・式場隆三郎宛書簡、一九四〇年八月六日付、『柳』二二卷下、一一七、一一八頁)。しかし、その後、この公開状にあたりと推定される「琉球文化の再認識―沖縄県知事に呈するの書」が掲載されたのは、マイナーなメディアである『科学ペン』五一九(一九四〇年九月)であった。(25) たとえば『民芸雑誌』(『民芸』二二四、一九四〇年四月、五三頁)。(26) 柳筆・金関丈夫宛書簡、一九四〇年一〇月三日付(『柳』二二卷中、二〇〇、二〇一頁)。